

服装に対する似合う・似合わないの意識について—女子学生の場合—

○小田巻淑子*、小林茂雄**

(*田中千代学園短大、**共立女大)

<目的>私達は被服を着用する際、似合う・似合わないを意識して、服装をコーディネートする。似合うという意識には、なんらかの判断の基準があると考えられるが、個人差がともなっていると思われる。着用者自身が似合うと思う意識と他者から見た似合うと思う意識は、必ずしも一致するとは限らない。女子学生を被験者として調査を実施し、似合う・似合わないの判断の基準や意識について、調査をもとに考察した。

<方法>首都圏在住の20歳前後の女子学生を対象に、1998年11月～12月に調査を実施した。調査内容は①服装の似合い度(7段階評定尺度)、②服装の評価基準(17項目、5段階評定尺度)、③服装のイメージ(10項目・5段階SD評定尺度)、④日常の服装における、好みやおしゃれに対する意識などである。①、②、③については、学生がデザイン・製作・着装した12服種の写真を用いた。なお、これらの写真は着装者自身が全体のトータルコーディネートを考え、似合うと意識した写真の中から予備調査をもとに選択した。データは単純集計、因子分析などにより解析した。

<結果>①の服装の似合い度の評定平均値の結果からは、6服種が似合う、3服種がどちらでもない、3服種が似合わないと判定された。②の服装の評価基準については、因子分析により、調和、デザイン、体型などの3つの基本的因子が抽出された。また③の服装のイメージについても因子分析により、調和、個性、成熟性などの3因子が抽出された。これら服装の評価基準や服装のイメージの因子に対する、12服種の平均因子得点の結果と①の服装の似合い度の評定平均値の結果は、同じ傾向を示した。